

国土地理協会 研究成果報告書

研究課題「山形県置賜地方における中山間地の土地利用の変遷に関する歴史地理学的研究」

研究代表者：岩鼻通明（山形大学農学部教授）

共同研究者：渡辺理絵（山形大学農学部准教授）

原淳一郎（県立米沢女子短期大学准教授）

加藤和徳（岩手大学農学研究科連合大学院博士課程）

関口 健（岩手大学農学研究科連合大学院博士課程）

目次

| | | |
|-----|-----------------------------|----|
| I | 調査日程 | 1 |
| II | 調査研究対象集落の選定 | 2 |
| III | 研究対象地域の概要 | 3 |
| IV | 研究対象の各集落における聞き取り調査および現地観察から | 7 |
| V | 文献にみる土地利用の変遷の歴史的背景 | 9 |
| VI | 地形図と植生図にみる農業的土地利用の変化 | 10 |
| VII | 総括および今後の課題と展望 | 12 |
| | 謝辞 | |
| | 参考文献 | |

I 調査日程

2013年8月29～30日 研究に参加した5人全員で、まず米沢市の上杉博物館において、当館所蔵の上杉文庫所収の置賜地方の絵図調査を実施した。そして、飯豊町の宿舎に宿泊し、これからの調査研究の進め方について打ち合わせを行った。翌日は西置賜盆地に展開する散村景観の眺望に関する現地見学を実施した。

2013年9月27日 山形市の山形県立博物館において、岩鼻および関口の2名で、当館所蔵の旧長井政太郎氏所蔵の村絵図の調査を実施した。

2013年10月3日 調査研究対象に選定した米沢市の綱木集落において、岩鼻および加藤の2名で、現地調査を実施した。

2013年10月4日 調査研究対象に選定した西村山郡小国町の白子沢集落において、岩鼻および加藤の2名で、現地調査を実施し、さらに南陽市立結城豊太郎記念館において、絵図調査を実施した。

2013年11月14日 南陽市立結城豊太郎記念館において、当館所蔵の置賜地方の絵図調査を、岩鼻および加藤の2名で実施した。

2013年11月15日 南陽市立夕鶴の里において、当館所蔵の養蚕関係資料に関する調査を、岩鼻および加藤の2名で実施し、さらに南陽市金沢集落において、現地調査を実施した。

2013年12月6日 南陽市立結城豊太郎記念館において、当館所蔵の置賜地方の絵図調査を、岩鼻および加藤の2名で実施し、さらに南陽市金沢集落において現地調査を実施した。

2013年12月13～15日 東京都の明治大学博物館および国文学研究資料館において、置賜地方の絵図調査を岩鼻および関口の2名で実施した。

2014年1月17日 上山市中山公民館において、当館所蔵の置賜地方の絵図調査を、南陽市ハイジアパークにおいて、当館所蔵のイザベラ・バードに関する資料調査を、岩鼻および加藤の2名で実施した。

2014年1月25～26日 東京都の国文学研究資料館において、置賜地方の絵図調査を、岩鼻・原・関口の3名で実施した。

2013年12月～2014年2月 山形大学農学部の学生を渡辺・岩鼻が指導して、地形図から土地利用をパソコンにより図化する作業を実施した。

II 調査研究対象集落の選定

米沢市上杉博物館および南陽市結城記念館における絵図調査の成果を踏まえて、以下の4集落を調査研究対象に選定した。

1. 米沢市綱木集落

上杉博物館所蔵の「綱木絵図」（年不詳）に綱木村の集落が詳細に描かれており、番所の文字記載と門および建物も描かれている。集落の中に円照寺が描かれ、上の畑および板小屋畑の文字注記が畑らしき絵画表現とともにみられるため、山村の農業的土地利用を描いた典型的な絵図であることから、研究対象に選定した。

2. 小国町白子沢集落

上杉博物館所蔵の「沼沢辺之図」（享和2年）に白子沢村の集落が詳細に描かれている。集落の周辺には水田が描かれ、赤い鳥居が描かれ、白山の文字注記のみられる神社や、善性院の文字注記のある修験、そして清安寺の文字注記のある寺院が描かれている。

とりわけ、この清安寺の入り口に2体の石造物が描かれ、さらに集落の入り口にも同様の石造物が描かれている。村絵図に石造物が描かれる事例は多くはなく、珍しい表現であるといえ、石造物研究者である共同研究者の加藤による現地調査が期待されることから、研究対象に選定した。

3. 上山市中山集落

結城豊太郎記念館所蔵の「享保の絵図」の中に中山村の集落が詳細に描かれている。図中には百カ所近い膨大な文字注記が存在し、多くの情報が内包された貴重な絵図である。中山集落は、共同研究者である加藤が詳しい民俗調査を行った地であり、現在の行政区画は上山市に属するが、かつては米沢藩領の最北端に位置し、境界を守る城が置かれた場所でもあることから、研究対象に選定した。

4. 南陽市金沢集落

中山集落と同じく、結城豊太郎記念館所蔵の「享保の絵図」の中に金沢集落を含む温泉集落である赤湯の町並みや盆地底の低湿地である白竜湖などを詳細に描く絵図が存在する。この絵図もまた、豊富な文字注記を含む貴重な絵図である。さらに、絵図の中に中世の板碑が描かれており、この絵図表現もまた稀なことから、石造物研究者である共同研究者の加藤による現地調査が期待される。白竜湖は近現代の農業改良事業の一環で、農地化が進められ、また赤湯の北側の村山盆地に通じる鳥上坂の斜面には、一面にブドウが栽培されている。このような近代化以前の姿を描いた絵図として評価できることから、研究対象に選定した。

III 研究対象地域の概要

研究対象地域については、上記のように絵図に描かれた情報などを勘案して、米沢市綱木集落、西置賜郡小国町白子沢集落、南陽市松沢集落、上山市中山集落の4か所に絞り、現地調査を実施した。

まずは、各地区の概要を以下に示したい。

1. 米沢市綱木集落

米沢盆地の最南端、兜山の西麓に位置する。地名は、要所間を繋ぐ所、あるいは飛脚・荷駄などの継場の意に由来するという。戦国期から見える地名で、置賜郡上長井のうち、天文22年の采地下賜録によれば、大塚将監が、遠藤又七分の所領を下賜されている。大塚は守護不入権を付与された有力地頭領主であり、会津との境として重視された土地であったと考えられる。江戸期は置賜郡のうちで、はじめ蒲生氏領、慶長3年上杉氏領、同6年からは米沢藩領、上長井に属す。村高は、文禄3年の蒲生高目録では82石余、「天保郷帳」257石余、「旧高旧領」無高。慶長年間の「邑鑑」では、村高82石余、免2ツ6分、家数55間（うち役家20）・人数181。「上杉領村目録」では、無高、戸数59・人口269、馬9・牛4、漆988本・紅花644匁余・綿620匁・蚕利32両余。明治8年地内の円照寺内に南原学校綱木分校設置。置賜郡を経て明治9年山形県に所属。同11年の一覽全図では、反別522町6反余、戸数56・人口265。明治11年南置賜郡に

属し、同22年南原村の大字となる。(『角川日本地名大辞典 山形県』1981年より)

2. 米沢市綱木の民俗調査

米沢市南原大字綱木は米沢旧市内から南に約12キロ、海拔580～620米の綱木川左岸第二段丘上に位置し、大体南北の方向に500米ほどの街村をなしている。

旧藩時代は米沢と会津若松をつなぐ会津街道の宿駅として一村をなしており、杉原謙の『莅戸太華翁』によれば、寛政3年(1791)頃は4軒の旅籠があり、玄米2俵下附されていたという。綱木から会津へは1094米の檜原峠を越えて檜原へ、また米沢へは727米の綱木峠を越して坂下へ荷物の輸送が行われたが、交通量の多かったのは、明治以降米沢まで鉄道が開通した明治32年(1899)までで、以後は交通集落としての機能を完全に失い、転住するものも出たが、残ったものは山仕事や畑作に専念するようになった。現在も水田はなく、山仕事・畑作が主な生業である(もともと山仕事の内容は異なっているが)。

戸数は現在39戸だが、文禄4年(1595)の『邑鑑』には55戸とある。綱木の鎮守は山神社で周囲には文殊様、弁天様、薬師様、白鬚様、それに蚕国大明神と刻んだ石碑などが散在する。

元禄10年(1697)に綱木村の山が、宿場の各戸に割り当てられ、実質的な面で山の私有制が形成された。しかも入会地はほとんど見られない。木流しは慶長10年(1605)に直江兼続が田沢衆の願出によって、木場を開き「木流し」を許可したことに始まり、明治29年に木流し量は800尋を数えたというが、明治33年(1900)に薪が木炭に代わるようになり木流しを中止し、綱木村でも製炭と養蚕に転ずるまでの約300年の歴史を持つ。

綱木の製炭は木流しと宿場町との消滅から来る自立の意味を持ち職業として導入されたものであった。明治41年(1908)に加藤氏によって黒炭製法が移入されると同時に普及した。主に冬山の仕事としてあった。

山の利用については、本山、中山、柴山を各戸に平均に分割して与えたため、山の利用も個々の所有の山を利用するが、手柴以下のものは自由に刈り取ってよいという慣習である。従って山菜などは自由に自家の食料として採取しており、種類も極めて多い。

火野(焼畑)の開発は宿場町形成当時の課題であったが、上杉藩の奨励で桑畑にすることが考えられたという。土用前に藪を切って火をかけ、その草木灰でソバを蒔き、秋に収穫する。第2年目にはそこを粟畑とし、第3年目に桑を植え、その後は桑の木の廻りの草を刈りとるだけで、場合によっては大豆程度の作物を植えるという。

植林は昭和39年から60年計画で、百町歩の公団経営の植林が実施されはじめた。これによって第2次大戦後の経済変動によって増加して来た出稼ぎが急激に減少した。

養蚕は製炭同様、木流しと交代に明治33年以降に導入されたもので、江戸時代の養蚕とは断絶が見られる。明治43年に野中氏が養蚕講習を実施したことで、大正2年頃に最

盛期に入ったという。最盛期には福島県の会津・伊達・大塩・熊倉あたりから春蚕の手伝いに季節労働者が入り、引続いて秋蚕にも手伝いに来た。当時は一戸当り1町歩以上の畑を桑園にいたといわれ、村あげての蚕神祭りがあったという（「特集 山形県米沢市綱木の民俗」置賜民俗学会年報『置賜の民俗』第2号、1967年、より抜粋）。

3. 小国町白子沢集落

置賜地方、桜川流域に位置する。江戸期は置賜郡のうち、はじめ蒲生氏領、慶長3年上杉氏領、同6年からは米沢藩領。外中津川に属す。村高は、文禄3年の蒲生高目録では151石余、「天保郷帳」301石余、「旧高旧領」439石余。慶長年間の「邑鑑」では、村高151石余、免2ツ4分、家数32間（うち役家3）・人数132。「上杉領村目録」では、村高425石余、本免1ツ3分、文政10年改反別32町7反余（うち田26町余・畑5町余）、戸数29・人口229、馬22・牛3、漆157本・綿120匁余・蚕利41両。当村は越後街道の宿場町として繁栄し、御札場が設置された。寺院は、天正18年創建の曹洞宗清安寺、元和2年創建の当山派修験善性院がある。鎮守は万治2年創建と伝えられる山神社で、春秋に例祭が催される。明治6年清安寺内に白子沢学校設置。置賜県を経て明治9年山形県に所属。同11年の一覽全図では、反別599町7反余、戸数39・人口212。明治12年、当村の37戸中半数近い16戸が商業（生糸商・質屋・荒物・塩・豆腐・太物・下駄・菓子）あるいは交通業（通運・旅籠屋・牛馬宿）に従事。明治11年西置賜郡に属し、同14年小白子沢村・森残村を合併。明治22年津川村の大字となる。（『角川日本地名大辞典』より）

4. 南陽市金沢集落

置賜地方、米沢盆地の北東部、吉野川の下流左岸東部に位置する。地内には入金・酒町前・七両坂・天秤屋などの金山にちなむ地名があり、背後の丘陵には坑口跡が残る。江戸期は置賜郡のうち、米沢藩領。北条郷に属す。当村は寛永15年検地により成立。村高は、「旧高旧領」では270石余。「上杉領村目録」では、村高192石余、本免1ツ5分、寛政3年改反別17町4反余（うち田12町8反余・畑4町6反余）、戸数14・人口103、馬11、漆617本・蚕利114両余。近世初期には当村の金山で金銀の採掘が行われていたと伝えられる。明治5年の戸数15（置賜県取調帳）。置賜県を経て明治9年山形県に所属。同10年赤湯村に合併。当地は赤湯町におけるブドウ栽培発祥の地とされ、甲州鉦夫により持ち込まれたという。明治42年、井桐技師の指導で棚造りによる甲州種の栽培を始め、置賜地方では最初の法人組織である金沢生産販売購買組合を組織した。大正初期からデラウェアを栽培。禁煙大谷地地帯の乾田化が進められ、収量増加とともに農作業の様子が一変している（『角川日本地名大辞典』より）

5. 上山市中山集落

村山地方、前川の上流域に位置する。地内に中山城址がある。戦国期から見える地名。置賜郡北条荘のうち。天文7年の御段銭古帳に「九貫百文 中山」とあるのが初見。ただし、この内500文は引分である。天文22年の采地下賜録によれば、小梁川尾張守・栗野右衛門・大津しほち・同源三娘が当地に所領を有していたことがわかる。この内小梁川尾張守は五軒在家とその守護不入権を、栗野右衛門は代在家・日影在家・浮免3000石をそれぞれ下賜されている。当地は伊達氏と最上氏の両勢力の境目に位置し、永正11年2月10日最上義定と伊達植宗との間に戦闘が行われたのを初めとし、以来攻防を繰り返した。当地の天守山に築かれた中山城は三方が溪谷で囲まれた天然の要害で、永禄～元龜年間の頃は中山弥太郎が城主であった。「伊達植宗日記」によれば、天正2年の最上義守・義光父子の抗争に際し、伊達輝宗は岳父義守を援助するため5月11日当地へ出馬し、七ヶ宿街道口の要地檜下を奪い、最上氏領上山辺の高松に放火している。天正16年伊達政宗が大崎義隆を攻撃、これに対し最上義光が大崎氏救援のため派兵し、伊達・最上両氏は再び戦闘状態に入る。天正16年と推定される7月18日付の最上義光書状写に「伊達后室中途へ被出興、及八十日滞在候而、種々悩望候、殊道之筋目無拋候間、令納得候」とあり、両者の戦いは義光の妹で政宗の母であるお東（保春院）の挺身的な行動によって回避された。同年11月22日の伊達政宗諸役免許状に「任中山地訴訟二、一諸役諸公事之事、一棟役銭之事、一成敗人之事、其身所へ理候上、可有其沙汰之事、一牢人衆格護之事、重罪人者可及其閉目之事、一中間共入立之事、何も令免許候」とあり、小国蔵人盛俊に対して当地の居住願いを認め、諸役免除その他の特権を付与している。小国蔵人はすでに天正15年頃から中山城に居住していたものと思われ、同年5月12日には最上・庄内和睦のため中山で合議していた片倉小十郎・嶺式部らが米沢に帰城している。江戸期は置賜郡のうち、はじめ蒲生氏領、慶長3年上杉氏領、同6年からは米沢藩領。北条郷に属す。村高は、文禄3年の蒲生高目録では1058石余、「天保郷帳」1670石余、「旧高旧領」では掛入口中山村として2293石余（ただし明治2年に分村した元中山村が中山村として1101石余）。慶長年間の「邑鑑」によれば、村高1700石余、免2ツ2分、家数72間（うち役家28）、人数434。「上杉領村目録」では掛入口中山として、村高2926石余（御届高1099石余）、本免2ツ、天明8年改反別248町2反余（うち田117町2反余・畑131町余）、戸数199・人口1219、馬82・牛12、漆8370本・紅花11貫405匁余・綿952匁余・青苧1貫820匁余・蚕利1503両がある。明治2年一部が元中山村となる。寺院には曹洞宗竜雲寺、浄土宗西福寺、浄土真宗本願寺派光勝寺がある。置賜県を経て明治9年山形県に所属。同11年の一覽全図では、反別1078町余、戸数221・人口1242、中山学校がある。中山学校は明治6年竜雲寺に創設。明治11年東置賜郡に属し、同22年元中山村・小岩沢村・川樋村と合併して、中川村となる。昭和32年からは上山市に属する。（『角川日本地名大辞典』より）

IV 研究対象の各集落における聞き取り調査および現地観察から

1. 米沢市綱木集落 2013年10月3日

豊島（旧姓梅津）さん、女性、昭和44年中学卒業 屋号はカネトで、この家が実家。かつては40数軒の家があったが、今は4軒のみ。中学を出た少し後まで蚕を飼っていた。桑はヤマグワが主だった。畑は植林されて杉林になった。水田をつくっている人もいた。シシ踊りが8月15日に行われる。昭和45年ころに一度上りジシをしたら、次の年に大火で下の家々が焼けてしまった。ウルシ掻きも記憶はある。炭焼きは関まで1時間半かついで歩いて売った。

佐藤さん、男性、週の半分は米沢の町で暮らす。この家は昭和12年に建て替えた。昭和14年生まれ。畑に杉を植林したのは、昭和30年代半ばのこと。杉を切った後に、カノ畑を数年して、ソバを植えた後にまた植林した。畑に桑は植えなかった。マメや穀類（アワ・ヒエ）を栽培した。炭焼きは昭和42年ころまで行っていた。女性が仲買商人のいる関集落までかつぎ、帰りに売り上げで米や醤油を買った。歩いて1時間半くらいの場所に窯があり、すべて民有林で山を分けた。上杉入部前はバラバラに住んでいたようだ。この家のすぐ上が番所で、かつては宿屋を営んでいた。蚕は昭和30年代半ばまで盛んだった。年2回だけ育てた。青苧はないが、アカソを採りに来る人がある。木流し、バイタが盛んだった。杉の木を川に流した。水をためてから抜いた。米沢の木場町へ運んだ。昭和21年に村の上半分が火事で焼けた。板小屋の水田は昭和40年代に開田したが、収穫があがらずに数年で止めた。会津からウルシ掻きに昭和25年ころまで来た。楮はなかった。戦後に少し植えたが、すぐに止めた。9月1日より山に入ってよい。山菜はきまりがない。狩猟もした。今は一人だけだ。村に6人しか住んでいない。多い時は60軒もあったのに。冬場は2～3回の雪下ろしが必要だ。昭和10年ころに電気が通じた。鉄道開通以前は輸送に牛を使っていた。隣の家では牛を飼っていた。旅籠が6軒あり、この家は上野屋で、他に上州屋、清水屋、若松屋などがあった。福島県の桧原と親戚もいた。養蚕の手伝いに桧原から数十人も来た。明治の磐梯山噴火では空が暗くなり、火山灰が飛んできたという。出羽三山参りの定宿でもあった。神社の鳥居は越後の人が建てた。入口の庚申塔は流されたが、下の養殖池から出てきた。

また、山神社の境内には近世の草木塔が存在する。この草木塔は置賜地方に分布が偏在する特殊な石造物であり、山形大学では「やまがた草木塔ネットワーク」を組織して、その解明にあたってきた。研究代表者の岩鼻は、その理事および運営委員会の委員を務めている。草木塔は、木流しとのかかわりが指摘されてきたが、この集落においても木流しとの関係が想定されよう。

なお、伊能大図には、米沢から会津へ到る街道に沿って、この綱木集落が描かれているが、その表現はステレオタイプであり、集落の景観を具体的に描いたとはいえない。

2. 小国町白子沢集落 2013年10月4日

小池さん、嫁いで50年の女性。水田は10年前からソバに転作している。下のほうは1町歩ほど水田が残る。畑はつくらなくなって20年余り。アズキを牛のエサにする。アワやヒエはなかった。我が家で山の上にイナリとジゾウを祀る。絵図にある「地藏」か。その上にコンピラの小さなお堂があり、おくまんさま、と呼んでいる。ウルシや楮はなし。青苧もなし。桑はかつて植えていたが、ほとんど切ってしまった。昭和40年ころまでは蚕を飼う人が少しはいた。ヤマグワが主だった。炭焼きは数軒が営んでいたが、山の奥に炭窯があった。今は集落全体で17～18軒ほどだ。かつては肉牛を育て、子牛をとる人も少しいた。酒屋で木の売り買いをした。森林組合の山仕事に行ったのは、昭和15年生まれの人が最後だった。山菜やキノコは自家用に採る。10年ほど前までは山で採って売る人もいた。鉄砲を持つ人は2～3人だ。越後街道の宿場だったので、各家の屋号を調べて残すことにした。かつて、カノ畑があったことは聞いた。そこが観光ワラビ園になっている。東日本大震災で、ワラビ園のお客がだいぶ減ってしまった。この家のルーツは越後三面とされ、本家に古文書が残る。

また、現地での観察で、集落の北側の入口および寺の参道入口に近世絵図に描かれた地藏菩薩の石仏が現存することが確認された。ただし、加藤の観察によれば、この石仏は絵図の作成年とされる享和年間よりも新しいとみられることから、絵図が後世の写本であるか、石仏が再建されたものか、いずれかの可能性が考えられる。

なお、国文学資料館での史料調査で、本集落の明治中期における各家の建物を具体的に描いた文書を発見することができた。この当時の集落構成および個々の民家の構造を知ることのできる史料として貴重なものであり、今後の活用を模索したい。

3. 上山市中山集落 2013年11月14日

男性・70歳代 蚕は昭和40年代まで盛んに飼っており、最後は2・3軒が昭和60年ころまで飼っていた。ブドウ農家は70軒くらいあって、果樹組合があったが、今は高齢化などで7～8軒しかない。ラフランスとサクランボが2～3軒あるが、盆地の真ん中の平地は霜の被害がある。今も宿屋の屋号が4～5軒残る。青苧は知らない。かつてはウルシの木がたくさんあったが、国道のバイパス工事でだいぶ切られてしまった。公民館の裏山にあるウルシの木に、東北芸術工科大学の美術の先生が毎年、ウルシ掻きに来る。

なお、伊能大図には、羽州街道に沿って、この中山の宿場町が描かれてはいるが、綱木集落と同じく集落景観を忠実に描いているとはいえない。

4. 南陽市金沢集落 2013年12月6日

松本さん、60歳代の女性。このあたりは、かつてデラウエアの大産地で、2000年ころまではデラウエアを栽培していた。大粒のブドウに切り替えて、その木が実をつけるまで。5年間は夫がトラック運転手をして働いた。嫁に来たころは、白竜湖のそばは谷地

田で、ヤチゲタをはいて耕作したものだ。山の斜面のブドウ畑は高齢化と後継ぎの不在で、どんどん止めていっている。我が家のブドウ畑は平地なので、娘婿が勤めを辞めて、後を継いでくれた。

なお、付近には中世の板碑が存在し、それらしき描写が絵図にみられる。それ以外にも、信仰と関わる石造物や小祠などが絵図には表現されていることから、このような石造物との関連もまた、共同研究者である加藤の今後の研究課題となろう。

V 文献にみる土地利用の変遷の歴史的背景

置賜地方における土地利用の変遷の背景として、米沢藩の藩政改革をあげることができる。米沢藩では、著名な藩主である上杉鷹山の改革によって、農業的土地利用が大きく変化した。明和～安永期の改革では、漆木・桑木・楮の各百万本の植立計画が実施され、漆蠟・養蚕・紙漉によって経済収益を増やし、農村の活性化をはかろうとするものであった。

なかでも、漆木栽培と漆蠟生産に力点が置かれたが、結果的には西日本で生産されていた樺蠟に質的にも価格的にも及ばず、予期したほどの成果をあげることができずに、漆生産は衰退に向かった。その後、寛政期の改革においては、蚕糸・絹織物生産に重点が移され、養蚕が奨励された（渡部史夫「米沢藩における寛政改革の基調」『出羽南部の地域史研究』所収、郁文堂書店、1986年）。

また、これらの苗木の育成も藩内の上層農民があたっていたことが知られるが、少ないながらも、ぶどうの苗木が育成されていたことは、近代以降の果樹生産との関わりから注目されよう（渡部史夫「近世後期における上層農民の養蚕経営」『出羽南部の地域史研究』所収）。

一方、漆・桑・楮と並んで経済的収益の高い特産物として青苧が栽培されていた。最上苧と称された村山郡の青苧は西村山郡大江町から朝日町にかけて、盛んに栽培されていたが、米沢苧と称された置賜郡の青苧は、白鷹山西南の丘陵部の村々で広く栽培されていた（渡部史夫「最上苧の生産と流通」『出羽南部の地域史研究』所収）。

安永9年（1780）の「樹芸記」によると、青苧の年産は、村山地方が1000駄、置賜地方が600駄、会津・越後が70～80駄といい、山形県内陸部の特産物であった。青苧は置賜盆地西北部、漆は置賜盆地東部、養蚕は置賜盆地東部に分布し、地域分化がみられた（吉田義信「米沢藩の蠟・青苧・蚕糸業の成立」『農業地理学研究』所収、文化書房博文社、1969年）。

ただし、青苧の栽培は明治中期の綿花の輸入増大にともない急速に衰退したために、栽培と農業的土地利用との関係はほとんど明らかにされていない。焼畑で栽培されたとも伝えられるが、その実態解明は課題といえよう。

以上のような政策の転換にともない、置賜地方、とりわけ平野よりも台地・丘陵部や山間部の農村の土地利用に大きな変化が生じたものと想定される。このような歴史的背景を

踏まえて、以下では、地形図と植生図にみる土地利用の変化について検討を試みたい。

VI 地形図と植生図にみる農業的土地利用の変化

1. 米沢市綱木集落

明治末年に測量された最初の5万分の1地形図（図1）では、集落に沿う道路の東側に桑畑が細長くみられる。また、集落の北側には道路沿いの西側に荒地が細長くみられ、綱木峠への分かれ道の三叉路付近にも桑畑がみられる。それ以外には水田および畑の記号はみられない。この桑畑は明治33年以降に養蚕が導入されたことに由来するものと思われる。

昭和30年頃の戦後に新たに測量された5万分の1地形図（図2）でも、上記の土地利用に大きな変化はなく、集落の南側に荒地が新たに追加されて描かれている程度であり、この時点でも水田および畑の記号はまったく存在しない。

それが、昭和40年代に新たに測量された2万5千分の1地形図から編集された5万分の1地形図（図3）では、かなりの変化がみられる。集落の北側に若干の桑畑は残るものの、荒地や畑に転換していることが読み取れる。それ以前の地形図では描かれることのない畑が集落の背後や南側にも散在する様子が表現されている。とりわけ、集落の南側の畑は近世絵図に描かれた畑に対応するものと想定される。ただし、現在は既に植林が行われたために、これらの畑は消滅している。

そして、それ以降のデジタル・メッシュマップによれば、昭和51年時点（図4）では、桑畑に該当する「その他の樹木畑」が比較的広範にみられ、集落の背後には畑もみられ、集落の南側には荒地も存在する。これらの表現は、昭和40年代の地形図と比べて、大きな変化はないものとみてよかろう。

それが、平成3年時点のメッシュマップ（図5）になると一変し、桑畑は姿を消し、荒地と化している。ただ、畑の分布に大きな変化はない。さらに、平成21年のメッシュマップ（図6）では、畑の分布にさほど大きな差異はみられないものの、荒地は姿を消し、森林に変化している。この間に植林が進んだというよりは、荒地の植生が遷移して雑木林になったものかと思われる。

2. 小国町白子沢集落

大正初期の最初の5万分の1地形図（図7）では、川沿いに水田が広がる景観が描かれており、その一部は沢の谷頭にも及んでいる。また、白子沢集落の北西側と中沢集落の西側に荒地が点在するが、森林の伐採跡地あるいは焼畑かと推測される。

それに対し、昭和40年頃の5万分の1地形図（図8）では、桜川に沿って、水田が広がるものの、沢の谷頭部の水田は消滅しており、若干の縮小がみられる。昭和52年の地

形図では、さらに水田は少し縮小傾向にある一方で、中沢集落の西側には荒地もみられる(図9)。この荒地は水田が耕作放棄されたものと想定され、現在では白子沢より上流の集落は廃村と化し、水田も多くは耕作放棄地となっている。

そして、それ以降のメッシュマップによれば、昭和51年時点(図10)では、地形図と同じく桜川に沿って水田が細長く拡がり、荒地はみられない。それが、平成3年のメッシュマップ(図11)では、大きく変化しており、白子沢集落の東側に畑が急増している。この土地利用の変化の原因は不明であるが、水田の転作が進められた結果かもしれない。

ところが、平成21年のメッシュマップ(図12)になると、それらの畑はほとんど姿を消し、それに代わって荒地が増加している。水田の転作をはかったものの、維持できずに耕作が放棄されたものとも考えられようか。

3. 上山市中山集落

明治末年の最初の5万分の1地形図(図13)では、集落沿いの低地と沢沿いに細長く水田が延びる景観が描かれており、台地・丘陵上は桑畑が広がっている。集落の西部と東部には僅かながら既に果樹園が存在しており、荒地も若干みられる。昭和20年代の地形図(図14)でも、さほど大きな変化はみられないものの、桑畑が徐々に果樹園へと転換しつつある姿を読み取ることができる。

それが、昭和30年代後半の地形図(図15)になると大きく変化し、水田に変わりはなく、桑畑が大きく減少し、多くは畑に転換している。この畑で栽培された作物は不明であるが、ホップやタバコなどの栽培が試みられたのかもしれない。

ところが、昭和40年代末の測量2万5千分の1地形図から編集された5万分の1地形図(図16)では、畑の記号が少なくなり、桑畑の記号が復活している様子が見受けられる。いったん、桑を伐採した畑が桑園に復活するとは思えず、昭和30年代の測量5万分の1地形図が正確性を欠くものと疑わざるをえない。その他の図幅でもおおまかな土地利用の表現が散見し、空中写真測量を中心に進め、現地調査が十分でなかったのかもしれない。その点、編集された5万分の1地形図は、詳細な土地利用表現になっていると評価できる。

一方、昭和51年時点のメッシュマップ(図17)でも、桑畑が依然として相当の広がりをもっていることが確認できる。それが、平成3年のメッシュマップ(図18)になると、桑畑はまったく姿を消してしまい、その多くは畑に転換している。ただし、この平成3年のメッシュマップでは、畑の土地利用には果樹園が含まれており(昭和51年時点では別々に表現)、果樹園が広い面積を占める山形県においては、この表現の簡素化は、たいへん惜しまれるものとなってしまった。この時点では、畑のかなりの部分が果樹園であると推測される。

そして、平成21年のメッシュマップ(図19)でも、さらに畑が拡大する様子が見取れるのであるが、現在では水田および果樹園ともに休閑地や耕作放棄地がめだつように

なりつつある。

4. 南陽市金沢集落

明治末年の最初の5万分の1地形図(図20)では、白竜湖をとりまく水田が広範にみられ、桑畑が周辺に散在する。山地斜面や白竜湖周辺の低湿地には荒地が相当の面積を占めていることが読み取れる。

それに対し、戦後まもない5万分の1地形図(図21)では、白竜湖の北側の鳥上坂の山腹の斜面に果樹園が広がる姿をみることができる。金沢集落付近では、白竜湖側の水田に隣接する部分にも果樹園が開かれている様子がみられる。これらの果樹園は明治末年からの土族開拓によるものであるとされ、昭和初期の地形図の修正版にも既に同様の土地利用が表現されている。

昭和30年代末の測量5万分の1地形図(図22)では、白竜湖周辺の低湿地に広がる水田と山地斜面の果樹園が対照的に描かれている。昭和40年代後半の測量2万5千分の1地形図から編集された5万分の1地形図(図23)でも、これらの土地利用に大きな変化はないが、白竜湖の南東部の水田地帯の中に荒地が散在しており、より詳細で正確な土地利用が表現されているといえよう。

一方、昭和51年時点でのメッシュマップ(図24)においても、このような土地利用にほとんど差異はみられない。ただし、平成3年のメッシュマップ(図25)においては前述のように果樹園は畑に包含された表現となっているが、分布について大きな変化はみられない。

ところが、平成21年のメッシュマップ(図26)になると、白竜湖周辺の低湿地で荒地が拡大している姿を読み取ることができる。減反政策によって、収量の低い低湿地での稲作が敬遠されたのかもしれない。この時点では果樹園の分布に大きな変化はみられないが、現状では山地の急斜面や標高の高い部分で果樹の耕作放棄地が散見するようになってきている。

VII 総括および今後の課題と展望

以上の資料調査および現地調査と図化作業によって、近世から近現代にかけての置賜地方の農山村における農業的土地利用の変化を明らかにすることができた。

山形県内陸部では、前近代から商品作物栽培が盛んに行われており、とりわけ米沢藩では上杉鷹山公の改革以来、熱心に商品作物栽培が導入されてきた。

それらの農業的土地利用が現状では、ほとんど残存してはいないものの、過去の地形図には、その一端が示されていたことが判明した。

ただし、残された課題も多く、近世絵図に描かれた土地利用は未だ十分に解明されていない。これらについては、さらに近世史料の収集と分析を継続する過程で解明できるとこ

ろもあろうと考えられる。

当初、近世絵図に描かれた畝をともなう畑の表現は焼畑を示すものと想定したが、調査の過程で、焼畑というよりも、いわゆる段々畑を表現したものではないかと考えを変えるに至った。もちろん、焼畑栽培が行われた可能性を否定するものではないが、比較的集落に近い場所に描かれることが多いことから、粗放的な焼畑農業ではなく、もう少し集約的な畑作であったのかもしれない。このような場所で青苧が栽培された可能性も高いのではなかろうか。

青苧栽培が置賜地方と同じく盛んであった村山地方でも、その栽培の実態は、ほとんど明らかでない。明治末年には栽培がほとんど衰退してしまったことから、やむを得ないと思われるが、古文書を通して手がかりを追い求めたい。

さて、山形県内陸部の中山間地では、近世から近代産業革命前夜までが、この青苧栽培の時期で、産業革命後には養蚕に急速に置き換わる。明治期最大の輸出産業であった生糸・絹織物の原料供給地として、山形県は北関東とともに重要な役割を果たした。

それは、第2次大戦後の高度経済成長期前夜まで続いたのであるが、高度経済成長期に入り、桑畑は急速に果樹園に転換されていき、今日の果樹王国山形県が成立するに至る。

ただし、山形県西村山郡大江町における国重要文化的景観の指定へ向けての事前調査で明らかになったように、中山間地の豪雪地域では、果樹は枝折れの被害を受けるために栽培には適していない（『大江町と最上川の流通・往来の景観保存調査 報告書』大江町教育委員会、2012年）。

このことが、高度経済成長期以降、急速な過疎化に見舞われた一因となっており、この地域に適した栽培作物を見出すことが大きな課題であろう。たとえば、果樹ではブルーベリー、山菜ではフキや根曲り竹（月山筍）などの栽培を試みるべきではなかろうか。

ところで、今回の研究助成では、近世絵図をGIS分析するまでには及ばなかったが、対象地域の絵図表現のGIS化を試み、近現代の地形図と比較可能なデータ化は今後の大きな課題として残されている。幸い年度末に、このテーマを取り上げた書物が出版されたので、その手法を参考にしたい。

また、置賜地方の村々を描いた村絵図が、まだまだ各地に多く所在することも、調査の過程で知ることができた。今回の研究助成では、それらを調査対象に含めることはできなかったが、今後も継続的に絵図調査と現地調査を進め、研究の集大成に向けて鋭意努力したい。

さらに、国文学資料館および明治大学博物館で、山形県内の村絵図のいくつかを実見することができたのであるが、上杉博物館および結城豊太郎記念館に所蔵されている村絵図は、極めて精緻なものであり、他の村絵図とは比較にならないほど、すぐれた出来の絵図である。

おそらくは、米沢藩の御用絵師であった岩瀬家が絵図作成に関与しているものと想定され、今後は米沢藩に残された絵図全体の中での位置づけを探っていくことも、大きな課題

であろう。これらの村絵図の作成年代は享保の日本全図が作成された時期に近く、国絵図の作成時期ではなかったものの、藩政改革との関連で、国絵図よりも、より詳細な大縮尺の絵図が藩域全体で作成された可能性もあろうか。

もうひとつの課題は、近代に入って当地を訪れたイザベラ・バードの記した『日本奥地紀行』の描写の真実性である。彼女が置賜盆地を「アルカディア」と称賛したことは、地元でも有名であるが、果たして近代前期に、そのような実態が存在したのかどうかを史実として追及する必要がある。

「南には繁栄する米沢の町、北には来訪者の多い温泉場である赤湯を擁する米沢平野（盆地）は、まさしくエデンの園である。「鋤の代わりに鉛で耕したかのよう」であり、米、綿、玉蜀黍、煙草、麻、藍、大豆、茄子、胡桃、西瓜、胡瓜、柿、杏、石榴が豊かに育っている。晴れやかにして豊饒なる大地であり、アジアのアルカディアである」との文章はよく知られている。

ただし、訳者の金坂氏は、その前まで雨中の山岳地域を歩いてきた後に、明るい太陽を背にして米沢盆地を眼下に見下ろしたという状況があることを理解しなければならない、と指摘している。

また、彼女よりも以前に当地を訪問したダラスが記した「穀物や果物が豊富で、地上の楽園のごとく、人々は自由な生活を楽しみ東洋の平和郷というべきだ」という彼の『置賜県雑録』に収められた文章がモデルとも指摘されている（宮本常一『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』平凡社、2002年）。

以上の研究成果は、山形大学の公開講座などを通して県民に広く還元し、また学会発表および論文化によって、世に問うことをめざしたい。

なお、本報告書の文責は研究代表者の岩鼻通明にあることを明記して、稿を終えたい。

謝辞

現地調査に際して、絵図の閲覧および写真撮影、写真提供でお世話になった米沢市上杉博物館と南陽市結城豊太郎記念館の方々に厚くお礼を申し上げます。また、上山市中山集落、南陽市金沢集落、米沢市綱木集落、小国町白子沢集落の住民の方々には、聞き取り調査にご協力をいただき、感謝いたします。

参考文献

『角川日本地名大辞典 山形県』角川書店、1981年

「特集 山形県米沢市綱木の民俗」置賜民俗学会年報『置賜の民俗』第2号、1967年
渡部史夫『出羽南部の地域史研究』郁文堂書店、1986年

吉田義信『農業地理学研究』文化書房博文社、1969年

『大江町と最上川の流通・往来の景観保存調査 報告書』大江町教育委員会、2012年

『伊能図大全』全7巻、河出書房、2013年

国絵図研究会『国絵図の世界』 柏書房、2005年

川村博忠『江戸幕府撰日本総図の研究』 古今書院、2013年

平井松午他編『近世測量絵図のGIS分析』 古今書院、2014年

木村東一郎『村図の歴史地理学』 日本学術通信社、1978年

イザベラ・バード、金坂清則訳注『完訳 日本奥地紀行2』 平凡社、2012年

長井政太郎『赤湯町史』 1968年

宮本常一『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』 平凡社、2002年